

琴の湖の由来

ここに又生国は南部八ノ戸糖塚村の生にて山師となりて深山幽谷を住み家とし、所々方々をかけ歩き、その名は八郎とて力量人に勝れし骨格なり。然らばこの者前世の宿縁にや有りけん。ある時友達、朋輩の山師と共に深山に入りて大木を伐りけるに、ある日沢辺に下り、山棘三びきとらえて是れをあぶ酒の肴に致し、一びき食してその味わいこらえられず、三びき共に皆食してしまふ。それよりのんど乾き水を呑まんと柄杓にて呑みけるが呑み足らずして桶の水も呑みしまふ。それよ

り川前に至り、大川へ口を付けて呑みけるが、呑み次第に自体は大きくなり太り、大蛇となり我が身ながらも恐ろしく思いけるが往くべき箇所なく、つらつら思いけるは、音に聞こゆる南部の国にて、南蔵の坊が瀉とて七里四方の瀉有り、この瀉へ飛込みけるに、南蔵の坊大いにいかり、互いに争い、三日三夜戦いて遂に八郎ほどの荒者なれども南蔵の坊に戦い負けたりと云う。又一説には八郎が住居して有りける瀉へ、南蔵の坊熊野山権現より鉄の草鞋をはき、この草鞋の切れたる所を住所せんとし立ち。諸国を廻り修行し、南部へ来たり草鞋切れける故、八郎が住居の瀉へ立寄り、大音声にてこの中には定めし住む者あるべし、早々に立ち去るべし、我れ此所に住居すべしと呼びわりけるに、八郎大いに怒り、鱗を立て両眼を日月の如くかがやかし、角を振り立て、唯ひと呑みとかかりけるを南蔵の坊事ともせず心得たりと秘呪文を唱えければ、劍、鎗、刀雨あられの如く降らして立ち向ければ、八郎は遂に負けたりという。南蔵の坊今は戸阿田山青龍大権現と申し奉る。

さてまた八郎は南蔵の坊に戦負け、住居もならず、残念千万なれども是非なく力に及ばず、夫れより七倉山へ来たり、ここに住居すべしと種々力を尽して埋めければち明かず是れ則ち七倉天神のおとがめなりという。それより秋田へ来たり、この土地を見立て、何方此方と往来しけるその頃大同2年2月24日にて、上樋口村地藏堂建立致し最中にて、彼の長者某を宿と致して居りける故不便とや思ひけん、彼に告げて申しけるは、我れしかじかの訳ありてここを水海となし住居致すべきなれば、早々家内のもの残らず立退き申しべしという。長者の亭主聞きて大いに驚き、川船数隻にそれぞれ仕末整居し、間もなく満ちくる潮に立ち煙り、忽ち大浪よせ来たり、暫時の間に一面の湖水となりける有様は、すさまじかりける次第なり、時に長者の者どもは、ようよう事にて浜辺なる岩屋に逃げのび、追々と元の如く三の蔵を立ちならべ、もとの長者に成りしという。

さて三の蔵石蔵と名のみばかり残りける。これ故に三倉鼻というなり。向うに見ゆる小森は糠を投げし所にて糠森と申すなり。この沢合は舟をかこいし所にて船が沢と申すなり。渚に岩井ありて暑水入と申すなり、早魃にも乾かず雨の降りにも水滴たずして、木結の跡や櫓の跡岩に残りて今に有り。長者が抱え置きし座当の坊が秘跡とて名のみ残りてあるなり。長者の主人こそ岩屋に鎮座し給えしより大権現と申し奉るなり。さて又長者のうばこそは、昔は今に至るまで女のよく浅ましく汐の満ち来るその時に糸紙一つ忘れしとて船より上り行くに、間もなく満ち来る汐におぼれ、すでに命危く有りけるを八郎は見るよりも足の先にてけり上げければ西の浜へ揚りける。それより今に足崎村と唱え申す。姥御前社はその村の鎮守となりて姥御前大明神とは敬いけるとなり。

ここに又仙北郡田沢村と申す所に一里四方の瀉あり、その昔この村に母親一人にて鶴子(タツコ)という娘一人あり、この娘十人にすぐれ、見る目姿うるわしく、人に羨ましく思われけるが、心に願いをおこし、そこの鎮守へ毎日毎夜参籠いたし、一心に願ひけるは、「南無帰命頂礼鎮守大明神何とぞ我が姿形いつまでも十六、七の若盛りにてあるべき様に守らせ給え」と、雨の降る夜も風の

夜も、毎日毎夜歩を運び願ひけるに、百夜に満ちる暁き方、御告げに曰く、「汝我れを祈る事眞実なり、さりながらその儀いつまでも十六、七の若盛りにてかわらぬ事のあるべきや、蛇道にも落ち入るならば、その面顔の替らぬ事も有るべし、人間にては叶え難し」とありけるとや。時に娘は居直りて強いて祈りけるは、見る目、姿、面顔は十六、七の若盛りにて替らぬ事のあるならば、姿形はかわるとも、苦ならずと一心こめて祈りければ「然らば濁中に入るべし」とありければ、さも嬉しげに笑みを含み、願望成就なし給えと、かの濁中へとび入りて浅ましきや日に三度の苦しみをうける蛇体の身とは成りけるとぞ承り及び候や。然るに、この鶴子が母親は、一人の娘を失いてなげきのあまり、一目娘に逢えたいと思いのあまり、毎日毎夜明松燃やして百日あまり通ひけれども逢う事のかなわぬ故、明松の燃え残り濁中へ投げすて戻りけるとかや。不思議なるかなその明松の燃え残り鱒と成りて真黒な魚なり。よって木の尻鱒と名付け今にあり、往古にはとりて喰う事などは無く候へども、当世の人はさもこれなしと承り申し伝えり。この濁の廻り、中ともに真砂石にて草一本なく、すきとおる程のきれいな濁なりという。然るに八郎は毎年秋の彼岸の中日には、彼の田沢の鶴子が濁へ行きて、寒中にはこの四里に八里の濁に居らず、春彼岸の中日にお帰りなりと承る。尤もこの濁中におわし事なれども、御堂は秋田郡男鹿船越村にて八郎大明神の社を建て、毎年二月八月兩度の祭礼ありと承り及候なり。

(註) この由来伝説は、琴丘町鹿渡、郷土史研究家 故工藤茂治氏が、昭和8年9月作製した「落葉籠」より引き写した 畠山氏の資料より転記したものであります。